

文 華 苑 の 歴 史

— サザンカの栽培 —

前号の「竹の庭」では、文華苑のサザンカをご紹介しました。寒中に咲くサザンカは、ご米館いただいた皆様方を、あたたかくお迎えしたことと思われまふ。サザンカは今なお花をつけており、見る者に心なごむひとときを与えてくれています。本号では、その健気なサザンカの文華苑での栽培についてご紹介しましょう。

文華苑も11月になりますと、木々が色付き紅葉の季節となり、冬支度を始める植物がほとんどです。その最中であって、サザンカはこれから花を咲かすのです。もの寂しい時期に、暖かみのある花を咲かせるサザンカ。まず、一重の濃い桃色の花が先頭をきって咲き、八重の桃と白、そして紅、と次々に咲き、3月頃まで開花時期は続きます。サザンカの本原種は花の色が白色です。日本原産の花であり、四国・九州・沖縄に自生していま

す。文華苑に植え付けてあるものは、品種改良された種類、あるいは、雑種です。その中には、苑で種子が落ちて自然に生えたものが10数本あります。合計すると40本余りのものが、冬の花として、苑を彩ってくれるのです。

樹齢600年で、樹高10数メートルに達しているものが、地方に存在しています。その本は一重の濃い桃色の花を咲かせます。濃い桃色の花ということは、品種改良されたものと思われまふが、それがいつ頃なされたかは定かではありません。サザンカはツバキ科の植物です。そのため、桃色や紅色のものは、開花時期が最も接近しているツバキとの自然交配、あるいは、品種改良と考えられます。ただし、その起源は良くは分からないのです。しかし、ツバキとの交配である証が、開花期間が延びたことにあると思ひます。

サザンカとツバキとを比較しますと、ツバキとの違いは、開花時

期が早いこと、花卉が基部で融合していないこと、葉が少し小さいことが挙げられます。花卉が基部で融合していないため、花卉が分散して散ります。それが、最も分かりやすい特徴となります。

サザンカは江戸時代に盛んに品種改良されました。現在では、およそ300種以上あると言われていまふ。大和文華館の文華苑には、10種類以上のものが植え付けてありまふ。

中でも種子から生えて生育したもの(実生のもの)には、微妙に花の色が違うものもあひまふ。ほとんどが一重の濃い桃色の花を咲かせまふが、八重の紅色の花をつけるものも現れまふ。一重のものが種子が出来やすいため、多くの親木は一重のものとなります。その結果、種子から育つたものに一重のものが多くなるのは、当然でありまふ。

種子から育てると、開花までには数年かかります。それでも、花

色の変ったものができるので、それが楽しみです。何気なく草刈りで刈り取ってしまったたり、自然に生えても環境に左右されたりして、そのまま放っておくと、ほとんど育ちまふせん。

もし、それら全てに人手をかけて育てていれば、数百本のサザンカが生えていることになるでしょう。しかし、文華苑には、何百種類もの植物が、何百本となく植わっていますので、それだけのものを植え付けるスペースがありまふせん。

実生のものは、正確に言えば、1本1本性質が異なっており、全く同じものは出来まふせん。ですから、スペースがあれば、冬枯れの時期に苑を彩ってくれるサザンカを、もう少し植え付けたいと思ひています。それも、文華苑の種子から育てたものと思うのです。それが、文華苑にとって、最も相応しいのではないのでしょうか。

(保安員・大平良一)

サザンカ



(フジノミネ)



(オトメ)



(オトメ・花のアップ)

